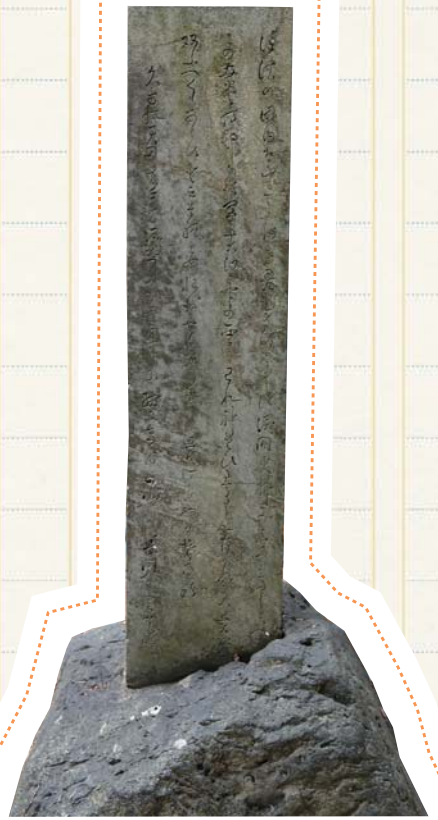
2 香川景樹（かがわかげき） 歌碑（かひ）

1丁目関宅→移設予定

信濃の国内は山もて山を畳みなすが中に浅間更科、
その名のみ高しといへども、
この安曇の郡なる関春江がやどの西におのれ神さび立てるらん、
たかねには其の姿双ぶべくもあらずといふ、
それ見ぬ恨を雲霧の遥かに思ひはるけやるその歌。



久方の天の岩戸のあけしより
くもいにのこる ありあけの山

景樹は江戸時代後期の歌人で、明和5年（1768）に鳥取藩士の子として生まれました。少年時代から国学を学び、成長してから京都に出て、短歌を学びました。清新でさわやかなリズムを歌風とし、桂園派という短歌の会をつくって、弟子の育成にも熱心であったようです。内山真弓の先生であり、真弓が帰郷する時には、「ひかずさへ十日いちばの道なれば　たつにもさわぐわが心かな」という送別の歌を贈っています（次ページ③参照）。また、池田学問所で学び、後に真弓らと巣雲の寿碑の文を頼山陽に依頼した関春江も弟子の一人でした。この碑には、景樹がその春江の郷里を詠んだ歌が刻まれています。歌の前書きからは、景樹が池田を訪れたのではなく、春江や真弓から聞いた関家の庭園から望む有明山のすばらしさを遥か京から思いやって詠んだ歌であることがわかります。

3 内山真弓（うちやままゆみ） 歌碑

十日市場
川会神社鳥居前

しきしまの道は
あまりにひろければ
みちともしらで
人やゆくらん

池田学問所

真弓は天明6年（1786）、会染の十日市場に生まれました。14歳から池田学問所で杉山巣雲のもと学びました。勉学に励んで力をつけた真弓は、さらに学びを深めるため、25歳の時京都へ行き、短歌で有名だった香川景樹について勉強しました。恩師巣雲が亡くなったとき、郷土の人々に請われ学問所の先生になるために戻ってきました。何年か教えていましたが、新しく教える人がでてきたので、学問所をその人に任せて、今度は江戸に出て短歌の勉強に打ち込みました。

57歳のときに、松本の和田に招かれて、短歌や書道を教えました。巣雲の寿碑の文を頼山陽に書いてもらえたのは、真弓の力が大きかったということです。十日市場の川会神社の鳥居前には「しきしまの道はあまりにひろければ　みちともしらで人やゆくらん」の碑が景樹の歌と並んで刻まれています。